日本中國學會報　第六十九集
二〇一七年十月七日　發行　抜刷

『飛龍全傳』と武術描寫

――白話小說と武藝書の交點――

玉置奈保子

『飛龍全傳』と武術描寫

——白話小說と武藝書の交點——

玉置奈保子

1、はじめに

白話小說、特に英雄傳奇と呼ばれる類のものの中には、武術の型（招式）とその動作を用いた戰鬪描寫（以下「招式描寫」）が多く見られる。やがて後世の武俠小說に引き繼がれるこれらの描寫については、未だ不明點が多い。それを解く鍵として、本稿では宋太祖趙匡胤の立身出世を題材とした淸代の白話小說、吳璿『飛龍全傳』[1]を取り上げる。

まず、招式描寫とはどのようなものか。その具體例として、『飛龍全傳』第三回「趙匡胤一打韓通　勾欄院獨坐龍椅」を次に擧げる。この場面の舞臺は北京大名府である。趙匡胤の愛人韓素梅が、のちの後周の功臣で、趙匡胤の好敵手ともなる韓通に言い寄られたことがきっかけで、趙匡胤と韓通は最初の鬪いを始める。

一個是開朝眞主。一個是興國元臣。一個是打遍汴京無敵手。一個是橫行大郡逞高强。這個要依六韜呂望安天下。那個要學三略黃公定太平。這個是金鷄獨立朝天蹬。那個是鴿子番身着地躦。這個是王女穿梭。那個是黃龍背仗。好個拳棒雙全韓二虎。遇了膂力超羣趙大郎。看他虎鬪龍爭。顯出我强你弱。[2]

（譯）一人は國を開きし眞の主、一人は國興しの元勳。一人は汴京をあまねく戰い無敵の名手、一人は大郡を橫行して强さを發揮する。こちらは六韜を呂望にならって天下を安んぜんとし、あちらは三略を黃公にならって太平を定める。こちらは「金鷄獨立」（型の名稱。以下武藝の型は「　」で示す）にて天を踏みしめ、あちらは「鴿子番身」にて地を踏み拔く。こちらは「王女穿梭」。あちらは「黃龍背仗」。あっぱれ拳棒雙全の韓二虎が、膂力が群を拔く趙大郎に出會う。彼らの虎と龍の爭いを見よ、どちらが强いかをはっきりさせる。

傍線部の「金鷄獨立」、「王女穿梭」などはいずれも招式の名稱であり、後述の通り武藝書などに見える。戰鬪場面でこのような招式描寫を用いる例は、すでに明代の『水滸傳』や『西遊記』などの白話小說に存在する。ところが現存する趙匡胤の物語で招式描寫が現れるのはこの『飛龍全傳』が最初であり、明代以前の先行作品には全く見えない。名君趙匡胤の戰いを扱う雜劇や平話などのテキスト類は明代まで

に複數存在しており、また兵書・武藝書やそれらを用いて製作された日用類書武備門の中にも趙匡胤の名が多く見られ、彼の名を冠する武術の流派まで存在するにも拘らずである。[3] では趙匡胤の物語において、明代までは存在しなかった招式描寫が、何故清代の『飛龍全傳』では採用されたのか。そして招式描寫の採用は、登場人物の描寫に如何なる影響を與えたのか。

好漢・英雄の條件がその武藝の强さにあるならば、彼らを主役とする作品で、戰鬪描寫が重視されるのは當然である。しかし白話小說中の戰鬪描寫に招式描寫が採用されるようになった原因やその影響については、未だに檢討が行われていない。

招式描寫や兵書・武藝書と白話小說の關係は、過去ほとんど研究對象として注目されてこなかった。その原因の一つは、その利用頻度の低さであろう。『水滸傳』などの英雄・好漢たちの鬪いを描く白話小說の戰鬪描寫において、招式描寫を用いる箇所はほぼ例外的存在である。例えば『水滸傳』全百回において、招式描寫が出現するのは第二回と第九回の二度のみであり、清代でも『飛龍全傳』と刊行時期の近い隋唐ものは後述の史大奈との對戰のみ、『說岳全傳』でも第六十九回のみと、全卷通して一～二回程度しかないことが多い。しかし利用頻度の低さを理由にその存在を等閑視すれば、特に英雄・好漢の活躍を描く白話小說の成立史を考える際に、重要な視點の缺如を招く。

何故なら、白話小說が成立する前段階の、民間藝能や演劇などの白話文藝は、武藝と深い關係を持つためだ。例えば孟元老『東京夢華錄』卷七「駕登寶津樓諸軍呈百戲」には「開門陣」というものが見えるが、宋の曾公亮・丁度の編集した官修の兵書『武經總要』前集卷二に、步兵と騎兵による「開門」・「閉門」の陣圖が揭載されていることがすでに指摘されている。[4] また田仲一成氏の『中國演劇史』[5]において、唐宋期・鄉村の逐疫儀禮と角觝・武技の關係の深さや、明代山西樂戶による「迎神賽社」の演目にかなりの武劇が含まれていることが明らかにされている。更に前述の「金鷄獨立」などは、輕業にもその名が見えており、おそらくよく似た姿勢などを取る技の間で、同じ名稱が使い回されてきたものと推測される。[6] これらはいずれも武藝と藝能の密接な關係を示唆する。

また、武藝そのものや兵書・武藝書の類を最も必要としたのは、おそらくは軍隊だが、そこは民間藝能の中心の一つでもあったことが、先行研究によって明らかにされている。まず藝能と軍隊との關係については、金文京氏の「「戲」考――中國における藝能と軍隊」[7]があり、その歷史的背景についてまとめられているほか、白話小說への影響については、小松謙氏の『中國歷史小說研究』の、特に第六章「『楊家府世代忠勇通俗演義傳』『北宋志傳』――武人のための文學――」に詳しい。[8] 小松氏は北宋の楊業の一族の物語である「楊家將」について、臨安の瓦市と楊存中（楊和王）との關わりから、これが軍隊を中心とした武人及び彼らを取り卷く藝人、アウトローを中心として發達した藝能を文字化したものであると指摘する。このような武藝と白話文藝の密接な關係が、招式描寫を白話小說にもたらす原因の一つであったことは想像に難くない。

このような背景から、本研究の目的は、①白話文藝・武藝書・白話小說の關係、②招式描寫の採用が白話小說に與えた影響、以上の二つを解明することである。そしてその意義は、特に好漢・英雄を中心とする白話小說の成立について、招式描寫という新たな視點からの檢討を試みることにある。本稿では、武藝の世界と特に關わりの深い趙匡

胤に關する故事をその手がかりとして考察を進める。

2、武藝書と白話文藝――「打韓通」について

まず明代の兵書・武藝書と、その中の趙匡胤像について、「打韓通」故事を中心に檢討を行う。なお明代の武藝書と日用類書については以前論じたため、ここでは簡單に述べるに留めたい。[9]

林伯原『中國武術史―先史時代から十九世紀中期まで―』によると、明代には、元代に置かれていた禁武令の撤廢と尚武政策、産業の急激な發達による庶民の生活レベルの向上、及び北方からのモンゴル各部の進入と東南沿海地方への倭寇の襲來という二つの外患を受けての軍事改革が、民間武術の發達をもたらし、それを背景として、兵書・武藝書が盛んに刊行されるようになった。[10] そのような兵書・武藝書のうち、本稿で取り上げる白話小説に關わるもので特に重要なものが、次に擧げる三書である。

①戚繼光『紀效新書』[11]…嘉靖四十五（一五六六）年の序があり、刊行以降幾度も復刻され、多く清刊本が出ている他、朝鮮で翻譯本が刊行され、日本でも江戸時代に和刻本が出版されており、更に明・茅元儀の『武備志』などにもその收錄内容が引用されている。もう一つの著書『練兵實紀』[12]ともども、軍事教練の教本であったと見られ、その卷十四「拳法捷要」に、「宋太祖三十二勢長拳」という、趙匡胤を祖とするという拳法の型についての解説がある。この「宋太祖三十二勢長拳」はかなり有名であったらしく、後世の兵書や日用類書などにもその名が見える。

②鄭若曾『江南經略』[13]…卷八上に、林氏によれば南方系の拳法諸流派が採錄されているが、その中の「趙家拳」に「趙太祖神拳三十六勢」、「蕪湖下西川拳二十四勢」とともに「秣陵關打韓童掌拳六路」が見える。これはおそらく雜劇などに見える「打韓通」故事に由來する名稱であろう。[14]

③趙光裕『武經標題正義』[15]…これは武擧のための參考書で、第八卷に付錄として占いや武藝の型などをまとめた歌訣（韻文もしくは定型文を用いた覺え歌）などが掲載されている。このうち、武藝の型に關する歌訣（以下「武藝歌訣」）には、型の名稱や動作の他に人名が讀み込まれたものがある。例として「又鎗法歌」を次に擧げる。これは槍の型を列擧したもので、その間に「楊家將」の登場人物の名稱を用いる。

黄龍出洞一條鎗。左按膝兮右按膝。火焰鎗處見太陽。搜山勢。鬼也忙。六郎好使勒馬鎗。伏虎勢。要隄防。披鎗勢。不可當。大神鎗下按八方。左肩鎗。右肩鎗。換手勢。使三鎗。七郎好使背神鎗。讒心昧計王樞密。簡打奸臣八大王。[16]

（譯）「黄龍出洞」は一條の鎗。左に膝をおしては右に膝をおす。「火焰鎗」のところは太陽が見える。「搜山勢」は幽靈さえせわしない。六郎は「勒馬鎗」を上手に使う。「伏虎勢」は防がねばならぬ。「披鎗勢」とはやりあってはならぬ。「大神鎗」は下に八卦に基づき動く（？）。左肩の鎗、右肩の鎗、「換手勢」は三回鎗を使う。七郎は「背神鎗」をよく使う。讒言して人を陷れる惡しき心の王樞密。鋼で奸臣を打つ八大王。

傍線部が「楊家將」の登場人物に關わる箇所だが、現存する「楊家將」もののテキスト中にはこのような歌訣は見當たらない。同樣の歌訣は他にもあり、その中では關羽などの歷史書に掲載される人物に混

じって、花關索のような完全に虚構の人物の名も見られる。

このような武藝歌訣は、おそらく本來は武藝の權威付けのために有名人の名を用いたものである。非實在人物の名が見えるのは、當時の演劇などの白話文藝の影響によるものだろう。當時、武藝の流派には有名な武人の開いたとされるものが複數あり、その中には非實在人物の名も散見される[17]。そのような狀況が、歌訣やそれを收錄する武藝書類の中にも反映されており、また宋太祖趙匡胤は、當時特にその名が利用された人物の一人であったと推測される。

この他に參考となるのが、日用類書の武備（演武）門である。日用類書とは明清時代に特に盛んに刊行された通俗的百科事典のことで、その出版者や編集者は、多くの場合小說の出版書肆や編集者と重なることが先行研究によって指摘されている[18]。

趙匡胤に關する內容を收錄する日用類書の中で特に重要なのは、明・徐九一撰『萬寶全書』（武田科學振興財團杏雨書屋所藏）である。その十九卷第一葉aの上段に、「趙太祖打韓通」と題された圖があり、棍を持って韓通を追う趙匡胤の圖が揭載されている。また圖の左右には「拳頭打成花世界。靴尖踢就景乾坤」という對聯がある。更に同一葉の下段には、「舞棒歌」として、「太祖金幹棒一根。穆陵關上打韓通」から始まる七言十二句の歌訣が揭載されている。

この『萬寶全書』の圖と對聯、及び歌訣の間では、趙匡胤と韓通の戰い方に齟齬がある。つまり、圖と歌訣では棍で戰い、對聯では格鬪戰を想定しているのである。このような例は他の日用類書にも存在する。『三台萬用正宗』卷十四「武備門」第一葉a下段冒頭に揭載されている「演武捷要序」は相撲の歷史についての概說文で、その中に次のような一文が見える。なお句讀點は筆者による。

昔者聖明之君。逆生變化滿身秀氣。拳頭上打成花世界。脚尖上踢就錦乾坤。穆陵関上曾打韓通。拳打處移杓[19]。

（譯）昔の聖天子は、逆生して變化し、全身が洗練されており、拳で打てば花の世界を成し、脚で蹴れば錦の天地を成し、かつて穆陵關で韓通と鬪ったときは、打ったところから杓を移した（天下を得た）。

この中に見える傍線部「拳頭上打成花世界。脚尖上踢就錦乾坤」という表現は、杏雨本の對聯に酷似している。この二例しか見當たらないので斷言はできないが、この表現は、武藝書においては「打韓通」の內容と結びついていたのかもしれない。この「演武捷要序」での趙匡胤と韓通は、武器を使わず相撲を行っていると考えられる。

その一方で、趙匡胤が棍を用いて韓通と戰う內容のものも共に收錄されている。武藝書・日用類書武備門の中に收錄される歌訣群に「邵陵棍法歌」というものがあり、その中に「打韓通」故事を組み込んだ歌訣が二首存在する。この歌訣群は先述「舞棒歌」と同一のもので、『萬寶全書』の他、『萬書萃寶』や『三台萬用正宗』等のほとんどの日用類書や『武經標題正義』に揭載されている。ただし收錄數に差があり、日用類書では『三台萬用正宗』のみ全四首、それ以外は第三首を除いた全三首となっている。そのうち、現存テキストで最も古い『萬書萃寶』版の第二首と、『三台萬用正宗』にのみ收錄される第三首を次に擧げる。なお「邵陵」は「少林」の訛であって、本來少林寺系の武藝と關係があるものと推測される。

『萬書萃寶』收錄「邵陵棍法歌」第二首

太祖金幹棒一根。穆陵關上打韓通。上方曾賽哪吒子。曾打紅巾定太平。獅子啣花乾坤小。趕得白猿抱樹存。白虎洗面休招架。低頭躲過定南針。黃龍獻鬚攔頭進。黑虎翻身一陣風。龍虎二棒人難敵。夜叉探海定乾坤。[20]

（譯）太祖は金幹棒一本で、穆陵關で韓通をぶちのめす。天上でかつて哪吒と争い、かつて紅巾と戰い太平を定めた。「獅子啣花」は天地を小さくし、白猿に追いつける「抱樹存」。「白虎洗面」ではけんかはやめておけ、頭を下げて避けるは「定南針」。「黃龍獻鬚」は頭をさえぎって進み、「黑虎翻身」は一陣の風のよう。「龍虎二棒」とは人は戰いづらく、「夜叉探海」は天下を定める。

『三台萬用正宗』收錄「邵陵棍法歌」第三首

棒法自宋起山東。關前伏虎打韓通。霸王執鎗斜步等。樊噲提槌教沛公。關公勒馬擎刀勢。韓信拖鎗進步門。張飛會使攔山法。諸姬擎鈿快如風。六郎提起金槌棒。韓信飛先進有功。[21]

（譯）棒法は宋代から山東で起こった。「關前伏虎」は韓通をぶちのめす。「霸王執鎗」は斜めに足を運んで待つ。「樊噲提槌」は沛公に教える。「關公勒馬」は刀をとる姿勢。「韓信拖鎗」は門に進む。張飛は「攔山法」を使える。「諸姬擎鈿」は風のように早い。六郎が持ち上げる「金槌棒」。「韓信飛先」は進んで功あり。

傍線部で示した部分が「打韓通」に關わる部分である。この二首の名稱からすると、趙匡胤は棍或いは棒を持って韓通と戰っているものと見られる。これは、「演武捷要序」の趙匡胤が韓通と相撲を行っているのとは異なる。

このような狀況と、「打韓通」以外の趙匡胤に關する故事が武藝書類や日用類書武備門にほぼ見えないことから、武藝の世界における趙匡胤の最も重要な故事は「打韓通」だと推測される。しかしその「打韓通」故事には、相撲・拳法で戰うものと、棍で戰うものが併存している。このうち、『江南經略』「秣陵關打韓童掌拳六路」、『三台萬用正宗』「演武捷要序」などのような相撲・拳法で戰うものを假に以下本稿では「相撲系」、『南宋志傳』、「邵陵棍法歌」のように棍や棒で戰うものを同樣に以下「棍系」と呼稱する。

日用類書に見られる相撲系と棍系の併存は、おそらく日用類書が引用した當時の武藝書類において、これら兩者の併存關係が存在したことを意味する。ではこのような狀況を生んだ原因は何か。それを探るためには、明代以前の「打韓通」故事の戰鬪描寫を確認する必要がある。

「打韓通」故事の現存テキストで最も古いものは、雜劇「穆陵關上打韓通」である。ここでは趙匡胤は韓通に馬を盜まれ、それを取り戻しに鄭恩と共に韓通の元に赴いて戰うのだが、そこでは素手で韓通を三度毆り倒す。その一度目を次に引く。[22]

［調笑令］看了他樣勢。忍不住笑微微。呀。量你那無力形骸敢恁的。［韓通云］徒弟每。趙匡胤是好拳法也。［正末唱］不消的慌詐喬敵對。向前來便見眞實。我跟前使不的閑料嘴。［做打倒韓通科］。

（譯）［調笑令］彼の樣子を見て、我慢できず笑う。やあ、お前のような無力な體でどうしようというのだ。［韓通云う］弟子達、

趙匡胤の拳法はすごいぞ。［正末唱う］あわててでたらめに立ち向かったりするには及ばぬぞ。向かってきたらすぐ眞を見せてやろう。俺の前で無駄口をきけなくしてやる。［韓通を打ち倒すしぐさ］。

後の二度もほぼ同様の戰闘描寫を持つ。雜劇における趙匡胤と棍法については、「趙匡胤打董達」の穿關に棍が記載されており、劇中でも棍を用いて戰う場面があるが[23]、「打韓通」雜劇では使用しない。

次に古いのは『南宋志傳』第二十九回で、ここでは「木林關」において、馬を奪っていった韓通を走って追いかけ、木の棒で叩き落とす。

匡胤大怒。持木棒飛似趕去相近追上大叫。偸馬賊休走。韓通聽得有人趕到。番轉身□弓架箭。放一矢來。匡胤眼快躱過。其矢已空。匡胤走近前一棒打落馬下[24]。

（譯）匡胤大いに怒り、木棒をとって飛ぶように追いかけ、近づいて追いついて叫ぶことには、「馬盜人、止まれ」。韓通は人が追いついたと知るや、身を翻して矢を番え、一矢を放つ。匡胤はすばやくかわし、その矢は當たらない。匡胤近づいて一發棒をふるうと、馬から打ち落とした。

ここでの趙匡胤像は、走り去る馬に走って追いつくなど、雜劇よりもやや人間離れしていることがわかる。「穆陵關」あるいは「木林關」で「韓通に奪われた馬を取り返す」というプロットの大枠は雜劇と同一だが、片や素手、片や棒を用いると、戰い方が異なる。

以上の狀況から、明代以前の「打韓通」故事について整理すると、次のようになる。

①相撲系：「打韓通」雜劇、『江南經略』「秣陵關打韓童掌拳六路」・『三台萬用正宗』「演武捷要序」…現存している文字テキストについては、明代においては武藝書が中心となる。

②棍系：『南宋志傳』、「邵陵棍法歌」、杏雨本卷頭圖…小說、武藝書及び日用類書のいずれにも見られる。

從って、明代「打韓通」故事には、元雜劇の流れを受けた相撲系と、そうでない棍系の二種類があり、武藝書を用いて編集されたものであろう日用類書武備門にのみ兩者が併存し、現在まで殘っているものと推測される。無論日用類書は轉載を重ねてきた二次資料であり、杏雨本の卷頭圖にしても他の小說などから流用してきた可能性は否定しきれず、全面的に信頼することは難しい。

では、このような狀況は、清代の『飛龍全傳』ではどうなっているのか。實は『飛龍全傳』では、この棍系と相撲系の折衷のような描寫が見られる。『飛龍全傳』では全編を通じて韓通と趙匡胤の戰闘場面が三度あるが、これは本來雜劇において三回連續で戰っていたのを、他の故事も利用しつつ引き伸ばし、三つに分けたものと考えられる。しかし一度目と二度目以降では戰い方にはやや差異がある。すなわち、一度目の第三回では雙方素手で爭い、二度目の第二十九回と三度目の第三十六回では趙匡胤が棍で不意打ちをした後に素手で毆るのである。これは何故か。

まず、前掲の第三回に當たる情節は、雜劇などには存在せず、おそらく『南宋志傳』第十八回[25]を下敷きとしており、戰いの形式も『南宋志傳』と同じく武器を用いない格闘戰である。しかし『南宋志傳』では招式描寫を用いないのに對し、『飛龍全傳』では拳法の型を中心と

した招式描寫を用いているという違いがある。次に二度目の第二十九回を擧げる。

那韓通正要把鄭恩打倒、忽地見匡胤躥到出耒、吃了一驚。往後一退、匡胤趁勢只一掃腳棍、早把韓通打倒在地。（中略）只說當下匡胤打倒了韓通、只一腳踏住胸膛、左手掄拳、照著臉上就打。[26]

（譯）韓通まさに鄭恩を打ち倒そうとしたとき、突然匡胤が飛び出してきたのを見て驚いて、一歩下がる。匡胤は勢いに乘って、棍でただ一度脚を一拂い、早くも韓通地に倒れる。（中略）さて匡胤は韓通を打ち倒し、ただ一足に胸を踏み、左手をあげて、顔を一發ぶった。

この場面では招式描寫を用いていない。趙匡胤はまず棍で不意打ちをした後、格闘で追撃をかけている。『飛龍全傳』において「打韓通」故事の馬が絡むのはこの回だが、趙匡胤の馬を盗んだのは韓通ではなく、その息子になっている點が異なる。次に擧げる第三十六回も、趙匡胤と韓通についてはほぼ同じ流れである。

鄭恩未及還手、早被匡胤看見、急將鸞帶迎風一縧、變了神煞棍棒、飛身竄到跟前喝聲、韓通休得恃强。俺來也。提起神煞棍棒、往肩窩上打來。韓通回頭一看、吃了一驚、說聲。不好。連忙將身一閃、棍棒落空、擧步要走。匡胤怎肯容情、趕上前又是一掃脚棍、只聽撲的一聲、韓通跌倒在地。匡胤丟開棍棒、伸手按住、擧起拳頭照臉而打。[27]

（譯）鄭恩未だ反撃できずに、早くも匡胤に見られて、急いで鸞帶を一振るい、神煞棍棒へと變えて、目の前に飛び込んでいき、叫ぶことには「韓通、强さをたのむのはやめろ。俺がきたぞ」。神煞棍棒をふりあげて、肩をぶった。韓通は頭を巡らして、おどろき、言うことには「まずい」。急いで身を翻すと、（敵の）棍棒は空振りし、（韓通は）足を上げて逃げようとした。匡胤がどうして許してやろうか、前に追いついてまたしても脚を一拂い、ただぶっという音がして、韓通地に轉ぶ。匡胤は棍棒を手離して、手を伸ばしてひっつかみ、拳を擧げて顔めがけてぶった。

第二十九回と第三十六回はいずれも鄭恩が先に韓通と戰い、ピンチになったところで趙匡胤が神煞棍棒による不意打ちを食らわせる展開になっており、傍線で示したように使われる表現もよく似ている。この部分は『南宋志傳』とはあまり一致しないので、或いは『飛龍全傳』の前身である「飛龍傳」によるものかもしれない。

以上の狀況を整理すると、まず『飛龍全傳』第三回では、『南宋志傳』中でも鄭恩を主人公とするプロットを利用し、一方第二十九回と第三十六回では『南宋志傳』の「打韓通」故事のプロットを分割して利用している。第三回で趙匡胤と韓通が相撲で爭うのは、『南宋志傳』中の鄭恩がこの場面では棍を用いなかったためであろう。描寫にはやや差異があるが、第二十九回と第三十六回の戰闘の流れがほぼ同一になるのも、やはり『南宋志傳』同樣の棍系の戰闘描寫の影響下にあるからだと考えられる。

では、何故第三回の戰闘描寫で、『南宋志傳』には存在しない招式描寫がわざわざ用いられたのか。その理由を探るためには、『飛龍全傳』における招式描寫について、確認する必要がある。

3、『飛龍全傳』の招式描寫

宋太祖趙匡胤の立身出世を描いた『飛龍全傳』の執筆背景は、作者の吳璿による嘉慶二年（一七九七）の序文から僅かに窺える。それによると、吳璿が科擧の受驗勉强をしていた乾隆十四年（一七四九）、ある人が「飛龍傳」という書物をくれたが、その內容は荒唐無稽であり、少し讀んだだけで放っておいた。結局彼は志を得ず、十九年後の乾隆三十三年になってからこの書物の編集を始めたという。[28]

ここに擧がる「飛龍傳」の正體は不明である。先行研究では、同じく趙匡胤の建國を扱い、特に『飛龍全傳』と後半部分が近い白話小說『南宋志傳』であるという說[29]や、また平話などの講釋あるいは講釋の筆記本によるものという說[30]などがあるが、『南宋志傳』說は『飛龍全傳』前半部分の大半の出所が不明であり、講釋本說は現存テキストが見當たらないため、實證は不可能である。從って、現狀では具體的にその出所を定めることはできない。[31]

『飛龍全傳』以前の趙匡胤故事の現存テキストには、まず平話では『五代史平話』、雜劇では「趙匡胤打董達」、「穆陵關上打韓通」及び羅貫中「宋太祖龍虎風雲會」、白話小說では『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』、『警世通言』第二十一卷「趙太祖千里送京娘」、戲曲では李玉『風雲會』があるが、いずれも明確な招式描寫は無い。[32]

一方『飛龍全傳』では、四箇所に招式描寫が存在し、三箇所は趙匡胤、一箇所は高懷德が戰鬪を行う。その內第三回はすでに觸れた。ここでは殘りの三例を擧げる。

①第二十回「眞命主戲醫啞子　宋金清驕設擂臺」（趙匡胤對宋金清・擂臺での戰鬪）

宋金清用個泰山圧卵勢、望着匡胤打來、匡胤把身子一迎、故意失腳一滑、撲通的倘倒臺埃。宋金清心中大喜、便使個餓虎撲食勢、來抓匡胤。匡胤見他來的凶猛、就使個喜鵲登枝、將雙足對着宋金清的胸膛、用力一蹬、早把宋金清踢倒。[33]

（譯）宋金清は「泰山壓卵勢」を使い、匡胤めがけて打ってきた。匡胤はその身で迎え、わざと足を滑らせて、ぼとんと臺の上に轉んだ。宋金清は心中大喜びで、すぐ「餓虎撲食勢」を使い、匡胤をつかもうとした。匡胤は彼が勢いよく來るのを見て、すぐ「喜鵲登枝」を使い、兩足を宋金清の胸に向けて、力一杯一蹴りすると、早くも宋金清は倒れた。

②第二十三回「太祖嘗桃降舅母　杜公抹谷逢外甥」（趙匡胤對杜二公）

有詩爲證。自幼學成五脚操、長拳短打逞英豪。先開一路四平架、後使翻身出洞蛟。（中略）匡胤聽了走過那遍、対面站住。先把兩腿偎了一偎、蹼一個双龍飛脚、離地就有八尺多高。（中略）有詩爲證。太祖神拳出少林、全凭本領定乾坤。發揚蹈厲師先哲、永奠華夷四百春。（中略）那大王見輸了一掌、就把架式改過、收回飛脚、換了長腿、先使個太山壓頂。匡胤又復閃過、大王又使個餓虎撲食、夜叉探海。[34]

（譯）詩にもございます。「幼い頃から五脚操（？）をならい、長拳・短打は思うがままの豪傑ぶり、まず一路の「四平架」を使い、後に「翻身出洞蛟」を使う」。（中略）匡胤は聽くや彼方へ向かい、反對側に立つ。まずは兩足をぴたりとそろえ、「雙龍飛脚」を一發蹴ってお見舞い、地面を離れること八尺もの高さ。（中略）詩にもございます。「太祖神拳は少林に出て、全く本領を

發揮して乾坤を定めます（天下を取る）。激しく足踏みして舞っては先哲を師として、華夷四百年の王朝の基礎を定めます。（中略）かの大王は拳で負けたのを見て、すぐに戰い方を改めて、飛脚を收め、長腿に變えて（この二句難讀）、まず「太山壓頂」を使う。匡胤がまたしてもよけると、大王はさらに「餓虎撲食」、「夜叉探海」を使う。

③第五十五回「課武功男女較射　販馬計大鬧金陵」（高懷德對李豹・擂臺での戰鬪）

只說高懷德當時跳上台去、也不通姓道名、兩下各自扎衣立勢、都把門戶擺開、要試高下。一個擺金雞獨立、一個擺手抱嬰兒、這一個使猛虎離山、那一個使蛟龍出海、這一個順手迎風抄下、那一個雙拳撲面驚人。兩個來來往往、都無一點下手之處。高懷德暗里思想、此人武藝過是高强、若不暗算、怎能取勝。定了主意、忽的虛閃一拳、使個回龍敗勢、緩步抽身[35]。

（譯）高懷德について申しますと、そのとき臺の上に飛び上がり、姓名もまだ通じていないのに、両方ともおのおの「扎衣立勢」をとり、みな門戸をひらき、どちらが强いか確かめようとする。一人は「金雞獨立」し、一人は「手抱嬰兒」をつかい、こちらは「猛虎離山」を使うと、あちらは「蛟龍出海」をつかい、こちらはかわして足拂い（？）、あちらは二つの拳で顔をぶって驚かせる。二人とも行ったり來たり、どこにも全くすきがない。高懷德がひっそり思うには、「この人の武藝は果たして高い、もしこっそり計略をもうけなければ、どうして勝つことができようか」。氣持ちを決めると、突然一發フェイントを入れ、「回龍敗勢」を使い、ゆっくりと身を引いた。

全體的な傾向として、まず全て一對一の格鬪戰で用いられる點が共通している。描寫の手法としては、歌訣、散文の兩方が見られるが、そのいずれもが先述の通り、先行する宋太祖關連の作品には見られない。對戰の場については、擂臺（格鬪技のリング）での戰鬪例（①、③）が二例ある。なお、招式描寫を伴う擂臺の描寫が二度も登場するのは、これ以前では他例が見當たらない。戰う相手については、擂臺の覇者二人（①、③）の他、趙匡胤のおじである山塞の親玉（②）、及び第三回の韓通との戰鬪という設定である。なお後述する通り、韓通は第二十九回前後では「韓教師」と呼ばれる、多くの徒弟を抱える武術教師であることに注意する必要がある。使用されている武術については、正體不明のものもあるが、「宋太祖三十二長拳勢」に含まれる「金鷄獨立」など、少林寺か趙匡胤に關わる拳・棍法に屬するものが四例ある。また趙匡胤を少林拳法と結びつける表現も②に存在する。これは武藝の世界の趙匡胤像が最もわかりやすく入り込んできた部分であると言える。このような『飛龍全傳』の招式描寫の特徵は、後述するように、先行する他の白話小說の招式描寫のものと、基本的には大差はない。

白話小說における最古の招式描寫の例は『清平山堂話本』「楊溫攔路虎傳[36]」で、ここでは「旗鼓」という基本姿勢の名が見える。これは宋太祖三十二長拳勢にも含まれる型だが、ここではまだ後の白話小說に見られるような複雜な型の掛け合いではない。それが變化するのは明代に入ってからで、招式描寫で歌訣を利用するようになり、また散文中でも樣々な型を羅列するようになる。その中でも歌訣の利用の實態を特に明確に示しているのが、次に擧げる『西遊記』と「邵陵拳勢

歌」と『隋史遺文』の例である。

『西遊記』第五十一回「心猿空用千般計　水火無功難煉魔」

（A）拽開大四平。踢起雙飛脚。韜脇劈胸墩。剜心摘膽着。仙人指路。老子騎鶴。餓虎撲食。最傷人蛟龍戲水。能兇惡魔王使個蟒翻身。大聖却施鹿解角。翹跟淬地龍。扭碗擎天槖。青獅張口來。鯉魚跌子躍。蓋頂撒花。遶腰貫索。迎風貼扇兒。急雨催花落。妖精便使觀音掌。行者就對羅漢脚。長拳開濶自然鬆。怎比短拳多緊削。兩個相持數十回。一般本事無强弱。

『萬書萃寶』「邵陵拳勢歌」第二首

（B）黑虎金槌按下方。邪行拗步鬼神忙。翻身拳惡心就打。赤膽拳全要隄防。上一步迎拳就架。五花勢踏破撩當。黑虎勢騰空就起。雙舞劒立勢高强。有神拳誰來遮攔。撥開攻進有何妨。誰人與我爭名利。丢下精神要一場。[38]

『隋史遺文』第十二回「定罪案發配幽州地　打擂臺揚名順義村」

（A）拽開四平拳。踢起雙飛脚。這一個韜肋壁胸敦。那一個剜心側膽着。這一個青獅張口來。那一個鯉魚跌子躍。一個餓虎撲食。最傷人那一個蛟龍戲子能兇惡。這一個忙舉觀音掌。那一箇急起羅漢脚。長拳架勢自然凶。怎比這回短打多掠削。二人相持數十回。不分勝敗與强弱。

（B）黑虎金鎚降下方。斜行要步鬼神忙。劈面掌參勾就打。短簇臁擘破撩襠。[39]

『隋史遺文』の招式描寫のうち、（A）は『西遊記』第五十一回掲載歌訣を省略し加工したもののようであり、（B）第一・二句は『武經標題正義』卷八や日用類書『萬書萃寶』などに掲載される「邵陵拳勢歌」の第二首第一、二句に近く、さらに第三句・第四句の末尾が「邵陵拳勢歌」第二首の第三句・第六句と一致する。

このうち日用類書である『萬書萃寶』は、おそらく當時特に影響力のあった書籍を用いて製作されている可能性が高く、[40]また『武經標題正義』はもともと明刊だが、清代にも重刊されている。從ってここでは、當時人口に膾炙していた歌訣を、文字テキストに依るか、或いは口頭で聞いたものを、ある程度改變して招式描寫として轉用したのであろう。『飛龍全傳』の「有詩爲證」として引かれる二首も、そのようにして小說內に入りこんだ可能性が高い。

以上のような狀況から、明代の『水滸傳』や『西遊記』の出現を受け、『飛龍全傳』が製作された清代には、戰鬪場面で招式描寫を採用することは珍しくなかったと見られる。『飛龍全傳』で招式描寫が採用された一因はここにある。

一方で、武人の活躍を描きながら、招式描寫を用いない白話小說も存在する。先述の『南宋志傳』やこれとセットの『北宋志傳』、及び『北宋志傳』と同じく楊家將を描いた『楊家府演義』の他、『三國志演義』などの歷史小說である。これらと『水滸傳』や『西遊記』の違いは明白で、正統な歷史を描いたという意識がある歷史小說には、このような招式描寫は入り込みようがなかったのである。これは、招式描寫は本來、關羽や楊業のような、國を背負う武將のためのものではなかったということをも意味する。

また、明代白話小說において、招式描寫を用いた戰鬪描寫が見られる場面には一定の傾向が存在する。それは①武藝者同士の一對一での腕比べ、②場所が「擂臺」などの武術の試合に用いるリングである場

合の二つである。兩者が兩立する場合もあれば、どちらか片方だけの場合もある。無論『西遊記』のような例外はあるが、大抵はこのどちらかに當てはまる。また、このどちらのパターンにおいても、勝者に賭け金などの褒美が與えられることが多いという共通點がある。

①武藝者同士の腕比べについては、『清平山堂話本』「楊溫攔路虎傳」、『水滸傳』第二回及び第九回、『古今小說』卷十五等、對戰相手が武術教師のパターンとして現れることが多い。『飛龍全傳』の韓通も、第二十九回では多くの徒弟を抱える武術の師範として登場するため、この武術教師型と見られる。

②「擂臺」が登場するものには、先述した『隋史遺文』、及び同樣の情節を語る『隋唐演義』第十二回と『說唐演義全傳』第七回[41]、ならびに『說岳全傳』第六十九回などがある。『飛龍全傳』では第二十回及び第五十五回がこれに該當する。なお、『水滸傳』第七十四回のように「獻臺」などの名稱で同樣のものが登場することもある。ただし「擂臺」などのリングでの戰鬪描寫が必ずしも招式描寫を伴うわけではない。

この二者の內、②「擂臺」のパターンにはおそらく現實に存在した行事のイメージが重ねられている。それは雜劇「劉千病打獨角牛」に登場するような、祭禮の興行における武藝者同士の腕比べである。雜劇「劉千病打獨角牛」の主人公劉千は、先述した『三台萬用正宗』「演武捷要序」にも相撲の開祖として名が擧がる。この「劉千病打獨角牛」は三月二十八日の東嶽生辰における「露臺」での演武を描くが、この行事は『清平山堂話本』「楊溫攔路虎傳」、『元曲選』本の高文秀「黑旋風雙獻功」、『水滸傳』第七十四回（但しここでは三月二十四日）などでも言及される。これについて、『武林舊事』卷三「社會」の二月八日に、雜劇や蹴鞠などの社會とともに「角觝社」、つまり相撲の興行を出す社會についての記事が見られるが、三月二十八日にもそのような社會が盛大に催されるとある[42]。第一節で先述した民間藝能や演劇などの白話文藝と武藝の交點の一つはおそらくここで、祭りにおける武藝者同士の腕比べの樣子を、白話小說に取り入れたものが、この「擂臺」での腕比べなのである。『飛龍全傳』第二十回及び第五十五回のものは祭禮の描寫ではないが、おそらくはこの流れを汲んで登場したものと見られる。

しかし『飛龍全傳』「打韓通」故事の場合、その過程に更に曲折がある。それが現れるのは趙匡胤が棍での不意打ちを開始する第二十九回で、ここでは「如今只將拳法而論、匡胤所學、本是不及韓通」と、武藝の腕については明確に趙匡胤が韓通に劣ると斷言した上で、趙匡胤は兵法に習って不意打ちを行った、ということになっている[43]。これは趙匡胤が壓倒的に强かった雜劇などとは明らかに異なる設定であり、しかもかなり唐突に插入されている。このような趙匡胤の設定變更の原因は不明瞭だが、その理由の一つは、おそらく『飛龍全傳』の韓通が武術教師として設定されたことだと見られる。

相撲系の描寫を持つ元雜劇「打韓通」では、韓通は手下を引き連れて現れ、趙匡胤と戰うために馬を盜む。この韓通のイメージが、武藝の世界でも生きていたことは先述した通りである。そして趙匡胤にも、拳・棍法の開祖というイメージが存在する。ここから、當時の民間において、韓通對趙匡胤の戰鬪が、招式描寫を用いるような武藝者同士のものと認識されることは不自然ではない。現役の武術教師として登場する人物は、『水滸傳』の洪教頭のように、招式描寫の出てくる場面では大抵敵役であるため、趙匡胤を武術教師には出來ず、韓通の方

にそのイメージが與えられたと思われる。

對武術教師戰の正しい描寫方法が、『飛龍全傳』第三回や『水滸傳』第八回のような招式描寫であるという意識が當時存在していたならば、『飛龍全傳』第二十九回においても當然、武術教師である韓通との戰鬪では、招式描寫を行わなければならない。しかしここは『南宋志傳』の描寫を引き繼いだ箇所でもあるため、趙匡胤は棍で韓通を打ちのめす必要があった。『飛龍全傳』の趙匡胤が雜劇でのような絶對的な强者ではないことは、第三回で神助を得なければ韓通に勝てなかったことですでに示されている。そこから『南宋志傳』の話と整合性を保ちつつ趙匡胤を勝利させようとすると、棍での不意打ちということになり、結果として「兵法に合わせた」という辯解が必要になったのであろう。

以上を總括すると、『飛龍全傳』の招式描寫の用法は、明代や清代初期の招式描寫を用いる白話小說の場合と基本的には同樣であることがわかる。しかしその一方で、招式描寫の登場する回が少し多く、他作品には基本的に一度しかない「擂臺」での戰鬪が二度存在するなど、武藝の世界との關わりがやや强い傾向にある。これはおそらく明清代には定着していた「武藝の流派の祖」としての趙匡胤のイメージが反映された結果であり、『飛龍全傳』で招式描寫が採用されたのも、そのイメージを最早無視できなかったためであろう。

『飛龍全傳』の招式描寫の來源は何か。テキストの來源の可能性として考えられるのは、①先行する「飛龍傳」によるもの、②武藝書などを用いて吳璿が書き加えた、の二つである。しかし先述した通り「飛龍傳」の正體は不明であり、また吳璿の回末批評には招式描寫に關するものは見當たらない。從って實證することは困難だが、その招式描寫に影響を與えた可能性が高いものの一つとして、演劇や相撲などの武藝の演武について考慮することは、非常に重要であると考えられる。

4、終わりに――白話小說と武藝書の交點

本稿で取り上げた趙匡胤は、雜劇などの白話文藝の世界にその名を連ねていたために、その故事が招式の名稱に用いられ、また宋太祖の名を冠した流派が生まれた。その影響を受け、『飛龍全傳』においては、現存する趙匡胤關連の先行作品中では描かれてこなかった、招式を用いる武藝者としての趙匡胤像が强烈に立ち現れてくることになったと推測される。そしてその結果、『飛龍全傳』は、『南宋志傳』という歷史小說に影響を受けながらも、武藝者を中心とする武俠小說のような性質をも併せ持つ境界的存在として、後世に殘ることになった。

これは冒頭で述べたような白話文藝と武藝の世界の密接な關係が、白話小說の描寫に大きく影響を與えたことを示している。武藝の權威付けのために利用された白話文藝の登場人物は、白話小說の戰鬪描寫として招式描寫が採用された際、小說でも招式を用いる人物としての調整を加えられるようになったのである。

今後の課題としては、祭祀・地方劇などとの關係についての調査が殘るほか、『飛龍全傳』に影響を受けていると見られる清代宮中連臺戲「盛世鴻圖」には、『飛龍全傳』に存在するような招式描寫が見當たらないという問題がある[44]。また、武術を使用するキャラクターの特性の檢討も、今後研究を進めていく必要がある。

注

（1）本稿では『古本小說集成』所收芥子園本影印による。

（2）前掲書五二～五三頁。なお句讀點は唐林標點本（上海古籍出版社、一九九五年、底本芥子園本）に從う。

（3）拙稿「明代後期日用類書武備門の構成」（京都府立大學國中文學會『和漢語文研究』第十四號、二〇一六年十一月、二〇九～二三七頁）參照。

（4）入矢義高・梅原郁譯注『東京夢華錄』（岩波書店、一九八三年）二五三頁參照。

（5）東京大學出版會、一九九八年。

（6）「金鷄獨立」と「鷂子翻身」については明・田汝成『西湖游覽志餘』二十卷「熙朝樂事」二月十二日項に「樹長竿於庭、高可三丈、一人攀緣而上、舞蹈其顛、盤旋上下、有鷂子翻身、金雞獨立、鐘馗抹額、玉兔搗藥之類」（『四庫全書』本による）とある。また同卷「霜降之日」項では帥府の執り行う軍神の祭りの際、種々の武藝を披露してみせるという記事があるが、その中に「夜叉探海」、「玉女穿梭」などが見える。明代當時武藝の型は祭りの演武で披露されることがあり、見る側も型の名稱がわかるようになっていたようである。

（7）中文研究會『未名』八號、一九八九年、一～二十八頁。

（8）汲古書院、二〇〇〇年。

（9）注（3）に前掲の拙稿を參照。

（10）技藝社、二〇一五年。中國における武藝の歷史については、松田隆智『圖說中國武術史』（新人物往來社、一九七六年）、笠尾恭二『中國武術史大觀』（福昌堂、一九九四年）、唐豪『中國武藝圖籍考』（山西科學技術出版社、二〇〇八年）なども參照。

（11）『四庫全書』所收本による。

（12）『四庫全書』所收本による。

（13）『四庫全書』所收本による。

（14）この「秣陵」や後に見える「木林」は「穆陵」という地名に對する當て字であろう。なお「蕪湖下西川拳二十四勢」は趙匡胤故事では見當たらず、むしろ『新編足本花關索下西川傳續集』などの花關索故事に關係するようにも見える。『江南經略』卷八には他にも棒に「趙太祖騰蛇棒」がある他、劍に「劉先主」「馬超」、弩に「諸葛弩」、拳に「張飛神拳」、「霸王拳」などの記載がある。

（15）山形縣市立米澤圖書館デジタルライブラリー http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA041.html（最終アクセス日　二〇一七年一月十三日）による。なお吉池慶太郎『米澤善本の研究と解題』（市立米澤圖書館、一九五八年）によれば、國立公文書館藏本・東北大學藏本に萬曆十六年の序がある。また上海古籍出版社『中國古籍善本書目』子部兵家類にも三種の版本が揭載されており、その中に明萬曆十六年萃慶堂餘泗泉刻本と金陵唐錦池刻本の記載がある。

（16）中國社會科學院歷史研究所文化室編『明代通俗日用類書集刊』（西南師範大學出版社、二〇一一年）第五册所收『萬書萃寶』（仁井田本影印）五十三頁參照。紙幅の關係上、以降必要のない限り型の說明は省略する。「使三鎗」はここでは回數と取る。「昧計」は「昧己」か。ここでは「惡しき心」と譯した。「簡」はおそらく「鐧」で、八大王の武器であろう。

（17）注（14）參照。また四庫全書本の明・何良『陣紀』卷二に「其孫家棒又宋江諸人之遺法也」という記事が見える。『水滸傳』の招式描寫については、これと何らかの關係があるものかもしれない。

（18）酒井忠夫『中國日用類書史の研究』（國書刊行會、二〇一一年）第十八章參照。現存する明刊本日用類書武備門の中で、最も古い『萬書萃寶』は萬曆二四年（一五九六）の刊行であり、明代に出版されたものでは、武藝書と比較しても早い部類に入る。

(19) 坂出祥伸、小川陽一編『中國日用類書集成4　三台萬用正宗』（汲古書院、二〇〇〇年）第二册、四五～四六頁。「滿身秀氣」はここでは洗練されていると譯したが、或いは「全身にすぐれた氣が滿ちている」か。

(20) 前掲書五三頁參照。「上方曾賽哪吒子」は孫悟空、「曾打紅巾定太平」は朱元璋のことか。

(21) 前掲書五五頁參照。ここでは「棍法歌」の一部として、武藝の型の名稱を羅列した體裁で譯したが、いずれも該當する型が管見の限り見當たらず、確證はない。

(22) 『全元雜劇』外編六（世界書局）所收脈望館鈔校本影印、四―三〇三～三〇三一頁による。

(23) 『全元雜劇』外編六（世界書局）所收脈望館鈔校本影印による。趙匡胤の棍棒については、他に『鐵圍山叢談』卷一に「鐵棒」についての記事が見える。

(24) 『對譯中國歷史選集』第七卷『新刊出像補訂參采史鑑南宋志傳通俗演義題評』所收內閣文庫藏明萬曆二一年唐氏世德堂刊本による。同書一九三～一九四頁參照。

(25) 戰鬪描寫については「昇驚不迭。被鄭恩當胸挽住。連打數拳。昇連忙跪下告饒。」（前掲書一二三～一二四頁）と實に簡素である。

(26) 前掲書七一三頁參照。

(27) 前掲書八八九～八九〇頁參照。

(28) 以下原文を引く。「已巳歲、余肆業村居、暗修之外、概不紛心。適有人挾一帙以遺餘、名曰飛龍傳。視其事、則虛妄無稽。閱其詞、則浮泛而俚。餘時方攻舉子業、無暇他涉、偶一寓目、即鄙而置之。無何、屢困場屋、終不得志。（中略）屈指計之、蓋已一十有九年矣。今戊子歲、復理故業、課習之暇、憶往無聊、不禁瞿然有感。（中略）於是檢嚮時所鄙之飛龍傳、爲之刪其繁文、汰其俚句、布以雅馴之格、閒以清雋之辭、傳神寫吻、盡態極妍、庶足令閱者驚奇拍案、目不暇給矣。（中略）時嘉慶二年、歲在丁巳仲秋之望、東隅吳璿題」。

(29) 氏岡眞士「『五代史平話』のゆくえ――講史の運命」（『中國文學報』第五十六册、一九九八年四月、五十八～八五頁）參照。

(30) 上田望「講史小說と歷史書（2）『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』の構造と變容」（東洋文化研究所紀要第一三七册、一九九九年三月、四三～九〇頁）及び大塚秀高「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連臺戲」（埼玉大學大學院文化科學研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第一一號、二〇一四年三月、二五～一二九頁）參照。

(31) 『飛龍全傳』の成立については、他に故事の來源について述べた付善明「『飛龍全傳』考論」（蘇州大學中國古代文學碩士論文、二〇〇八年）、キャラクター變化について述べた鐘鳳「古代小說戲曲中趙匡胤形象流變研究」（寧波大學中國古代文學碩士論文、二〇一四年）なども參照。

(32) 「宋太祖龍虎風雲會」は古本戲曲叢刊四集所收の古名家本による。また李玉『風雲會』第五齣「擂臺」に「（風入松）蒼龍入海戲波濤。餓虎番身舒爪。（淨）子疋舉鼎臨潼鬧。打虎勢傳訛存孝。拖刀記雲長排袍。從月里去偸桃」（『李玉戲曲集』上海古籍出版社、二〇〇四年、六〇五頁）というものが見え、この「打虎勢」はあるいは武藝の型かと疑われるが、確證はない。

(33) 前掲書四八七～四八八頁。原文「倘」は「躺」であろう。

(34) 前掲書五八二～五八四頁。ここには趙匡胤及び少林寺に關わる型が二つ見える。①「四平架」…『萬書萃寶』「宋太祖三十二長拳勢歌」に「高四平」「中四平」が見える。②「夜叉探海」…『萬書萃寶』「邵陵棍法歌」第一首第六句及び第二首第十二句がいずれも「夜丫探海定乾坤」となっている。相撲にも同名の型が存在していたのかも知れない。なお①②はいずれも『紀效新書』にも名が見える。

(35) ここには趙匡胤及び少林寺に關わる型として「扎衣立勢」が見える。『萬書萃寶』「宋太祖三十二長拳勢歌」第一句に「懶扎之勢手撩衣」、注「出門用架子勢」、『紀效新書』卷十四に「懶扎立勢出門架子。變下霎步單鞭對敵。若無膽向先空自眼明手便」とある。

(36)『古本小說集成』所收明嘉靖刊本影印による。同書二六九頁に「楊官人道。我敢共都頭使棒。員外閒棒。都頭拿一條棒、起做了一个旗鼓。楊官人也做一个旗鼓道。」とある。管見の限り、楊家將ものではこれが唯一の招式描寫の用例である。

(37)『古本小說集成』所收世德堂本影印による。一三〇五頁參照。

(38) 前掲書五二頁參照。

(39)『古本小說集成』所收本による。同書三一九〜三二二頁參照。

(40) 注（3）に前掲の拙稿、及び拙稿「明代後期日用類書律例・律法門收錄歌訣の各日用類書間における關係について」（京都府立大學國中文學會『和漢語文研究』第十三號、二〇一五年十一月、七九〜一一七頁）參照。

(41)『隋唐演義』と『說唐演義全傳』（いずれも『古本小說集成』所收本による）は『隋史遺文』と同じく擂臺における史大奈との戰鬪の情節だが、『隋唐演義』はほぼ『隋史遺文』と一致するのに對し、『說唐演義全傳』は戰っている人物（秦瓊→金甲）及び用いている型が完全に異なる。

(42)『四庫全書』本原文「二月八日。爲桐川張王生辰、霍山行宮朝拜極盛、百戲競集」。以下社會の名稱が列擧され、その華やかさが語られる。また同項目に「若三月三日殿司眞武會、三月二十八日東嶽生辰、社會之盛大率類此、不暇贅陳」とある。同樣の社會に對する記事は『夢粱錄』卷十九にも見えるが、相撲に關するものはない。

(43) 原文「如今只將拳法而論、匡胤所學、本是不及韓通。若使兩个公平交易、走手起來、以視鄭恩曾經救駕、武藝略高、今日尙且輸了銳氣、則匡胤定當甘拜下風矣。（中略）今日二次相逢、又是韓通未曾隄防、匡胤有心暗算、合了兵法所云出其不意、攻其無備、所以又佔了上風」。

(44)『古本戲曲叢刊』（中華書局、一九六四）九集六所收影印本による。

【參考文獻】

吳蕙芳『萬寶全書：明清時期的民間生活實錄』（花木蘭文化工作坊、二〇〇五年）。
氏岡眞士「『殘唐五代演義』への道――小說と講史」（『中國文學報』第五十二册、一九九六年四月、七七〜一〇三頁）。
同「李玉の傳奇と明清小說：『風雲會』の周邊」（『人文科學論集 文化コミュニケーション學科編』三三號、一九九九年三月、三六一〜三七九頁）。
小松謙『中國古典演劇研究』（汲古書院、二〇〇一年）。